

淀川流域委ウォッチャーズNo.5(051212版)「第二期委員会は新たな川づくりを実現できるか？」

いよいよ、ダムについての方針に対する意見書の提出が迫ってきた。ただ最近の議論を聞いて、傍聴席のいらだちがいかほどのものか、流域委員はご存知だろうか。流域委員の発言が自分の考えと違うというような単純な問題ではない。なぜだろうか。

淀川水系流域委員会は、新河川法の制定に伴い、環境への配慮や住民意見を取り入れた新しい河川整備を目指すために設置された。堤防強化と流域対応に重点を置いた、あらゆる洪水に対しても壊滅的な被害を回避する治水。流域全体の水需要のバランスをはかり、人間のためだけに供給を増大し続けることを改める利水。今までの河川整備による環境の悪化を食い止め、川らしい環境を積極的に回復しようとする取り組み。住民意見を取り入れるために、河川管理者自ら働きかけるシステムづくり。新しい川づくりを実現しようと、時代を先取りした議論を展開してきた。

ほとんどの委員が「こんなに大変になるとは思わなかった」と言いながら、せいっぱいの努力をされていた。「環境派の学者や住民運動の人間ばかり委員に入れるから、こんな提言をする」と批判する人もいることは知っている。けれども、新河川法の理念に従うと新しい河川整備はどうあるべきかに大まじめに取り組めば、こうなるだけだと私は思う。第一期の委員を見渡しても、持論ばかりを主張して他人の考えを聞かない方はおられなかった。最も意見の分かれたダムに関して、賛成の人も反対の人も、個人的に言いたいことは、いろいろとあっただろうが、流域委員会で提言してきた考え方に従っておられた。新しい考え方についていけない人は、言葉少なだった。

河川管理者も大変だった。どこまで行くのかわからない議論を見守るのは、さぞ不安だったろう。けれども、こちらは大まじめに提言に従ってくれた。今まで一番苦手だった住民との対話にも果敢に取り組む姿には、涙ぐましいものがあった。住民説明会や対話討論会もだんだん手慣れて、自画自賛する姿が、かわいかった。環境をまじめに勉強されているのにも、頭が下がった。庶務の方たちの激務ぶりには、単なる仕事以上の熱意が感じられた。

そして、中間とりまとめ、提言、意見書と進むにつれ、

委員会の傍聴者の顔ぶれが変わってきた。最初のころは、ダークスーツに身を包んだ、いかにも仕事で来ている人ばかりだったのが、だんだん、ラフな服装の一般の住民が目につくようになった。しかも老若男女を問わず、バラエティに富んでいる。先日、流域委員会を研究するシンポジウムに参加させてもらったが、私はこの傍聴席の充実ぶりこそ、淀川水系流域委員会の誇れるところだと思う。サイレントマジョリティの意見ももちろん配慮すべきだろうが、多くの住民は、河川管理者の決定に対して問題意識さえて持っていない。問題意識のない住民や、前提とする考えを理解しない住民とは、議論が成り立たない。委員会の傍聴に来る人は、問題意識のある人で、そういう住民を集められる流域委員会は、まさに新河川法を実践していると言える。淀川水系流域委員会は、委員、河川管理者、住民が一体になって新河川法に基づく新しい河川整備を目指してきたのだ。

第二期の委員会になって、その一体感が失われた。新規の委員の多くに、河川整備を変えようとする意欲が見られない。今までの流域委員会の考えに、新河川法に照らして不備があるという批判なら、いいことだ。新しい委員が加わることで、新しい河川整備はさらに充実するだろう。けれども、単に従来計画を変える気がないので、その議論は不毛だ。傍聴席の住民のいらだちは、そういう議論を聞かされているためだと思うのだ。継続の委員の中にさえ、第一期の議論を理解していたのだろうかと思わせる発言が飛び出す始末だ。

今、一番困っているのは、河川管理者だろう。傍聴席の住民は、新しい河川整備への期待が裏切られるだけで済む。そんな失望は、今に始まったことではない。けれども、河川整備を変えようとまじめに取り組んできた河川管理者は、いきなり上ったはしごをはずされるようなものだ。ある河川管理者は、公開の委員会でみんなに聞いてもらえなかったのは残念だが、「河川整備を変えられないのなら、淀川水系流域委員会を設置した意味がない」と、逆に委員を鼓舞したのだ。

第二期の委員には、第一期に負けない気概を見せていただきたい。意見書の内容が、第二期淀川水系流域委員会の評価を決めることを、肝に銘じて取り組んでいただきたい。

流域委員会裏話【4】 恐怖の突然現地視察

反省会の席上、突然「現地視察に行こう!」という話が持ち上がる。その場で庶務さんが河川管理者に連絡。次の日には日程が委員に知らされる。先着で申し込み、4、5日後には現地にいることになる。その間河川管理者は、コースを決め、資料を作成しなくてはならない。庶務が下見に行くときもある。委員もちゃんと7、8人は参加する。

突然現地視察(庶務さん、命名)は、住民運動が本職の委員と退職された先生方の旺盛な好奇心と知識欲に支えられていた。意見書の作成にも、大いに役立った。40代、50代の先生方より、退職された先生の方が楽しげに活動されてた。委員は年齢じゃなくて、精神の若さで選んだ方がいいんじゃない?ねえ。